

# このスポット・おすすめ!

ナチュラルな空間で味わう  
自家製のスパイスカレー **クルミ舎**

一人でもグルーブでも、居心地のいい時間を過ごす。涼やかな緑の庭とナチュラルなインテリアが目に心地いい、外国人住宅を改装した人気カフェです。店内にゆったりと配置されたテーブルや椅子はあたたか、床も壁もほとんどすべて、店主の知念愛乃さんが一人で造作したものです。が、一も二もとは花屋で働いていました。と聞けば、そのセンスのよさには納得。3年前の10月、結婚・転居・出産を経て、「いつかはチャレンジしたかった」という念願のカフェをオープンしました。

今やお店の看板にもなった、10種類のスパイスを使ったカレーは、「せっかくなので家で食べていただくのだから、家庭ではなかなか味わえないものを」と考え、得意料理のレパートリーから厳選したものを。現在は「スパイスチキンカレー」と「香味野菜のキーマカレー」をレギュラーに据え、もう1種類は月替わりで提供しています。

ドリンクの種類も充実しており、なかでも季節のフルーツシロップジュースはクルミ舎オリジナルの逸品。砂糖漬けの果物をベイスにした旬が香る手作り飲料で、フックリした甘さが特徴です。スパイスカレーにしてもシロップジュースにしても、実は「子どもっぽい」母親が家で作っていたものを手本に、私なりにアレンジを加えたものなんです。と愛乃さん。メニューの背景にそっと忍んだ母娘のそんなストーリーも、このお店の魅力を引き立てているのかもしれない。

住所：北中城村渡口1871-1  
電話：098-935-5400  
時間：11:00～16:00(L.O.15:30)  
休み：日曜日、月曜日、祝日  
駐車：2台  
(おもなメニュー)  
\*カレー  
・スパイスチキンカレー…1,200円  
(サラダ、ドリンク付き)  
・香味野菜のキーマカレー…1,200円  
(本日のスープ、サラダ、ドリンク付き)  
・お子さまカレー…小300円、中500円  
\*ドリンク 単品各450円  
・季節のシロップジュース  
・コーヒー(ホット、アイス) など



## 読者プレゼント

このスポット・おすすめコーナーで紹介の『クルミ舎』で使える



3名様  
Q なぞなぞ  
植物を育てるのがへたな鳥は何?

9月号当選者  
★比嘉 忍さん(読谷村在住)  
★下里 末子さん(沖縄市在住)  
★長浜 洋平さん(那覇市在住)

## ワイワイ広場

読者プレゼント応募方法

宛先 読谷村字伊良皆237-1 ウィンズ『広報誌係』

①住所 ②氏名  
③年齢 ④職業  
⑤電話番号

裏 ⑦ご意見 ⑧ご感想

応募者の中から抽選で、読者プレゼントを進呈致します。どしどしご応募下さい!

締め切り 2017年10月20日消印有効  
「当選者は次号(Vol.158)にて発表致します」

『Freshウインズ』は、建築でお手伝いをさせて頂いた施主様をはじめ、地域にお住まいの方など、ご縁をいただいた皆様に配布致しております。諸事情により配布不要となった際は大変お手数ですが、その旨ご連絡下さい。(ウインズ広報誌係)

⑥ カバ  
向きのパワフルで素敵は  
生き方が表情に出ている仔と  
感じながら、何度も記事を読  
みました。  
私も50代を目前に、何かを  
始めたいな、始めなければと  
考えていたので 勇気ももらいました  
ありがとうございます

# Fresh ウィンズ

人と人とのつながりを大切に...池原建設が大切なお客様にお送りする手作り広報誌



0120-229-512 ウィンズ 池原建設 検索

### 今月の歳時記

- 10月7日(土)～9日(祝) 第47回 那覇大綱挽まつり  
会場・開催地/那覇市・国際通り、国道58号、奥武山総合運動公園
- 10月14日(土)・15日(日) OKINAWA OCTOBERFEST 2017  
会場・開催地/北谷町・北谷フィッシャリーナ
- 10月22日(日) 第8回 座喜味城通りふれあい祭り  
会場・開催地/読谷村・座喜味自治会館(メイン会場)、座喜味城通り、座喜味城跡ほか
- 10月28日(土)・29日(日) 第43回 読谷まつり  
会場・開催地/読谷村運動広場(メイン会場)

夏の暑さも一段落し、過ごしやすい陽気の日が増えてきました。かりゆし姿からスーツ姿へ、衣替えのタイミングを計っている人も多いでしょう。食欲の秋、スポーツの秋、行楽の秋、そしてお祭りの秋。読谷まつりは10月最後の週末に開催。今年もお天気に恵まれるといいですね。







ストリートストーリー

# Street Story!

## 自宅のオーディオルームでお気に入りの「音」に浸る 趣味の世界を極めて人生を豊かに。地域を楽しく



■パソコンを駆使した音楽の編集もお手のもの。さまざまな機材が置かれたテーブルや棚も、それぞれの用途やサイズに合わせて自ら製作したものです

読谷村楚辺在住で、FMよみたん専務取締役などを務める金城輝彦さんは、沖繩を代表する女性デュオKiroroの「文字通り」の生みの親。実家の2階ベランダを改装してこしらえた趣味のオーディオルームで、長女の綾乃さんは物心ついたときから音楽に触れ合い、ピアノを覚え、プロのミュージシャンとして羽ばたいていきました。今月はそのオーディオルームに案内してもらい、輝彦さんが半生を懸けて注いできた音と音楽への情熱についてたつぷりと話を聞きました。

### こだわりの機器をそろえ 創意工夫で質を高める

金城輝彦さんの本職はIT系のエンジニア。ネットワークシステムの設計・開発業務を中心に、県内の官公庁や教育機関、大規模施設などで数多くの実績を残してきました。

その傍ら、プライベートでは音響の趣味が興じて、40年近く前に実家のベランダを改装してオーディオルームを増築



■こだわりのスピーカーやアンプが並んだ自慢のオーディオルーム。木目の箱に入ったスピーカーが「JBL2215」、輝彦さんの後ろに見えるのが「YAMAHA NS1000M」

理想の「音」を求めてコツコツと設備を整え、現在は7台のアンプに4組のスピーカーをつなぎ、ミキサーまで完備しています。壁・床・天井の工事もぬかりなく、「クラッシュックとジャズの程よい響きを求めて残響時間を0.8秒になるように吸音材の配置や部屋の形状を設計しています」とのことです。

実際にどのような機材・設備を使っているのでしょうか。例えばざっとスピーカーを見渡しても、パワフルで限りなく生音に近い低音域を再現できる「JBL2215」、高域から低域まで音のバランスの取れた3ウェイの「YAMAHA NS1000M」など、その道の人が聞けば納得の名機が並び、お値段だってなかなかのもの。とはいえ、ただハイスペックな製品を買い並べただけでは、本当に良質な音響空間をつくることはできません。そこはさすが本職がエンジニアとあって、エンクロージャー（スピーカーを格納する箱）を自作して、音を鳴らしたときの振動がうまく抜けるようにバスレフのダクトの長さを調整して共振周波数（低域）を決めたり、床との隙間を調整したり、既設のコンデンサーを交換して音質を高めたり、それぞれの

機器・設備の特性を見極めながら、自分なりに創意工夫を重ねていきました。輝彦さん自身も「仕事とはまったく異なるジャンルとはいえ、現状の状況を把握して、限られた条件の中でいかにいいものをつくれるか」を志向する点では、相通するものがありますね」と話しています。



■若かりし頃に描いた自作スピーカーの設計図が今も手元に

「音の魅力に目覚めたのは小学校高学年の頃。アメリカのヴァイオリニスト、エリック・フリードマンが演奏する『ツイゴイネルワイゼン』（サラサーテ作曲）のレコードを聴き、その音色の美しさに強烈に心を打たれました。以後は「あの感動を超える音を、自分の部屋で再現してみたい」



■(左)ギターのお手並みもまさにプロ級 (右)輝彦さんの「原点」となったレコード



と考えるようになり、ちょよここと機械いじりをスタート。学校の勉強が進んで理科の知識がついてくると、オーディオマニアに定評のある月刊誌『ラジオ技術』をむさばるようになり、熟読しました。聴くだけではなく自ら演奏する側として、学生時代は音楽活動にも傾倒しました。大学ではギター愛好会に所属し、シンガーソングライターの海勢頭豊氏のレコーディングに参加したこともありま。音楽のジャンル別に6本のプレミアムギターを所有しており、現在もその腕前はプロ並みです。

「何事も中途半端がイヤで、突き詰めないと気が済まない性格」とあって、社会人になっても音と音楽に対する情熱は衰えぬまま。「IT業界は日進月歩の世界。書店が開いている時間に仕事が終われば、必ず立ち寄って新しい情報を仕入れ、その足でオーディオコーナーも物色していました。結婚して子どもが生まれたときには既にオーディオルームの工事は完了し、長女の綾乃さんが5歳の頃にグラランドピアノを購入しました。「子どもだからといって電子ピアノやアップライトで様子を見るのではなく、やるのであれば最初から本物の音に触れさせたかった」という輝彦さんの意志が、ここにも強く現れています。

### 感動の記憶を血肉に変え 培った知識を地域で生かす

趣味は基本的に一人で（も）楽しむ（める）もの。休日前の夜、あるいはちょっと悩みを抱えたとき、一人ソファーに腰を下ろし、お気に入りの音に包まれるひとときに、どれだけ癒されたか知れませんが、それでも趣味の楽しさを他の人と共有したり、趣味で培った知識・技術を別の場所で役立てたりする機会があれば、趣味はその人の人生をますます豊かなものにしてくれます。

例えば輝彦さんの場合、私たちに身近なところでは、FMよみたんの役員として音響の指導にあたっています。人の声質・音量は千差万別で、しかもしゃべり慣れたMCと緊張したゲストのときでは当然、対処の仕方も異なりますが、「誰がいつ聴いても、安定して聴きやすい状態でリスナーに届けるのがプロの仕事」と論じ、「放送品質を一定のレベル以上に保つことが、ラジオ局としての評価を高めることにつながる」と話しているそうです。



■3ヶ月に1度のFMよみたんパーソナリティー研修の様子。放送品質の向上に日々研さんしています

この他、ウィンズ7月号（154号）で紹介した「きらめくユーバンタタ焼けコンサートin楚辺」では、総合プロデューサーとして、地域のあらゆる世代を巻き込んだ様々な企画を実現させるとともに、音響



■シチュエーションも抜群、「てんでんあしびコンサート」の様子

仕事か趣味かという区別が無意味と感ぜられるほど、まるでライフワークのように振る舞う輝彦さんの姿は、生き方に迷う後進のお手本。「自分が感動したものに「私」の場合はあのレコードの音色ですが、どれだけ思いを寄せられるか、その感動を自分のものにするにはどうすればいいかを考え続けることが大切」と語る言葉は、強い説得力を持って私たちの胸に響いてきます。